

「今、私の晴雨計は！^{③④}」

「挟まれた国・

ポーランドの悲劇」^②

平山征夫

大戦後、この人類の犯した虐殺行為を二度と繰り返さないようこの事実を後世に伝えるべくアウシュビッツはミュージアムとツツから見学をする。ゲートには「ARBEIT MACHT FREI」（働けば自由になる）の文字が掲げられていた。Bの文字が逆さまになっているが、建設に携わったポーランド人政治犯が咄嗟にやったのだそうだ。ナチスはユダヤ人たちを「移住させる」と騙して連れてきたが、収容所内にそう思わせるよ

うなことを行っている。このゲートもそうだが、「旅の汚れを落とすためシャワーを浴びよう」と言っているガス室に入れたが、ガス室の天井にはシャワーの吹き出し口も作ってあった。この第1収容所は囚人が植えさせられたポプラの木が育ち緑陰をつくり、レンガ建ての建物はしっかりとっていて、監視塔や高圧電流を通じた有刺鉄線がなければ収容所とは感じられない。しかし建物内の展示室を見るうちに、ここで行われたことが実感として伝わってきた。

歴史展示室コーナーでは、まずガス室で殺された人々のことを知る。移住だから必要と思って持参した持ち物等が膨大な量で残っており展示されている。メガネ、義肢・義足、食器類、旅行鞆、大人用と子供用とに仕分けられた靴、靴クリムまである。旅行鞆には大きく持ち主の名前が書かれてある。シャワーが終わって戻った時、持ち主が分かるようにと書いて書かせたものだ。子供たちの服もあった。一番ショックだったのは約二トンもある女性の髪だ。生地原料に使われた残りだ。そうだが、犠牲者の肉体の一部であるこの髪の展示は胸に迫るものがあり、ここだけはシャッターが押せなかった。その傍には殺害に使われた害虫駆除薬チクロンBの空缶の山があった。続く部屋では収容所での生活などを知る展示のほか、解放後発見されたナチス親衛隊（SS）が報告のため撮

った写真や、通達書など物的証拠が見られる。引き込み線に止まった貨車から降りたユダヤ人が篩にかけられているところや、正装した子供が不安そうに見つめている姿や、痩せ細りながら労働に駆り出されている様子など、当時の様子が生々しく甦る。収容所の端には、ガス室と焼却所（大きなものは敗戦時証拠隠滅のため破壊された）のほか、長くこの収容所の所長を勤めたルドルフ・ヘスの住居とその子供たちが遊んでいた向かいの地に残るヘスの絞首刑跡や、ゲシュタポによって捕らえられたポーランド人の抵抗活動家が銃殺刑に処せられた“死の壁”などが残っている。

第2収容所「ビルケナウ」はア

ウシュビッツから1kmあまりの
ところにあるが、アウシュビッツ
とは全く違う印象を受ける。何も
ない野原に木造のバラックのよ
うな収容施設が並び、鉄道の引き
込み線が延びているだけだ。冬、
此処に吹く風を想像すると厳し
い収容所生活がすぐに想像出来
た。訪れた日は九月の陽光の射す
日であったが、寒々とした雰囲気
に思わず身震いし一九四二年か
ら四三年にかけて極寒の中でソ
連軍に苦戦を強いられたドイツ
軍は、ソ連軍捕虜収容の目的で建
設したこの収容所にユダヤ人を
送り込んだ。ユダヤ人殲滅がスピ
ードアップした。木造の収容所の
中は三段の木製のベッド棚が並
ぶだけ。トイレ棟は長いコンクリ

ートの構造物に穴が等間隔で空
いただけのものだ。決まった時間
に一斉に並んで用を足すことを
強いられた。冬のポーランドは零
下二〇度以下になるが、凍傷や肺
炎で亡くなる人も多かった。引き
込み線の上に立つと、SSの撮っ
た写真が甦った。引き込み線に到
着した貨車から降りたユダヤ人
はこの場所で医師の篩にかけら
れたのだ。そう思うと歴史の重さ
に押し潰されそうになる。
アウシュビッツを訪れてもう
一つ印象に残ったことがある。そ
れはわれわれをガイドしてくれ
た中谷剛氏の言葉だ。この収容所
ミュージアムの二〇〇人余の公
認ガイド中唯一の日本人ガイド
だ。彼は学生の時クラクフを訪れ、

人々の優しさに触れ、一九九一年
ポーランドに移住、一九九七年か
らアウシュビッツ・ミュージアム
のガイドとしてアウシュビッツ
の事実を伝えている。最近増えた
日本からの訪問者で彼のガイド
を望む人は多い。彼のガイドに当
たった私たちはラッキーだった。
饒舌な説明とは程遠かったが、説
明適格だった。「写真を撮ってく
ださい。でも観光旅行のような撮
り方はしないでください」「髪の毛は肉体の一部です。亡くなった
人たちの尊厳もありますので出
来れば撮影は遠慮ください」など
心に響いたが、次の説明にははっ
とさせられた。「こうした虐殺が
起こったのはヒトラーという異
常な人物が登場したからではあ

りません。彼はすべて民主主義の
ルールの下でのし上がったので
す。言い換えれば国民が彼を押し
上げたのです。これからも同様な
ことは起こらないとは言えませ
ん。ヒトラーが起こしたことに対
し現在の人たちに責任はありま
せんが、二度と起こさないこと
は責任があります」。このミュ
ージアムに多くの人が世界中から
訪れるようになった。私たちが訪
れた時も、前はイスラエルからの
高校生、後ろはドイツからの婦人
たちだった。人類全員が過去の歴
史事実としてだけでない将来に
亘る教訓とすべきなのだ。
ポーランドはドイツとロシア
(ソ連)という大国に挟まれた国
だ。この地勢がポーランドに悲劇

をもたらしてきた。一七九五年、ロシア帝国、プロイセン王国、オーストリアの三国に分割され、それから一二三年間地球上からポーランドは消えた。ポーランドが再び独立を回復したのは一九一八年だった。ロシア革命でロシアが、第一次世界大戦の敗北でドイツ帝国が崩壊したからだ。しかし、それも長く続かなかった。一九三九年九月一日ドイツ軍がポーランドに侵攻、次いで一七日ソ連軍が侵攻、一〇月六日にはポーランド全域が占領されてしまった。

亡命政府がロンドンに樹立されたが、再び実質消滅した。ドイツとソ連は秘かにポーランドの分割統治を打ちあわせていたのだ。悲劇はその占領下で幾つも起こった。ドイツ占領下のポーランドに強制収容所が設置され、多くのポーランド人が欧州中のユダヤ人らに交じって犠牲となったが、ソ連領では二万二千人に上る大量虐殺が行われていた。解放されたと言われるポーランド将校等捕虜の多くが、銃殺され森の中に埋められたのだ(いわゆるカティンの森事件)。ドイツ側の指摘に対し、逆にドイツ側の犯罪としてきたソ連がその事実を認めたのはゴルバチョフ政権になってからだった。第二次大戦でナチス。

事件はなかったが、状況は同じだった。傀儡政権の下耐え忍ぶ時代を過ごし、ポーランドが真の自由と独立を勝ち得たのはワレサなど「連帯」が選挙で勝利し、「ポーランド共和国」が誕生した一九八九年だった。大国に挟まれたポーランドの悲劇の歴史がこれで終止符を打つことを願っている。こうした過酷な歴史に耐えてきたポーランドの人たちは、どこまでも粘り強い。今回私たちが訪れたポーランドの町のうち、戦災を免れたのはクラクフとトルンだけだ。ワルシャワ、ポズナン、ヴロツワフなどは破壊し尽くされた。しかし、戦後ポーランドの人たちは、廃墟から立ち上がり旧市街を元通りに復元した。「粘り

強いだけでなくにかくポーランドの人たちは優しい」と中谷さんは言う。沢山の悲劇を見てきたからだろうか。

この文章を書いている最中、本屋で塩野七生の「日本人へ」を見つけた。その中に次の指摘があった。「民主政が危機に陥るのは、独裁者が台頭してきたからではない。民主主義そのものに内包された欠陥が表面に出てきたのである」と。そして「歴史を経ることと人間は進歩するとは思っていない」と……。

(平成29年12月8日)